日本中国語学会々報　2015年12月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　太田斎（会長）……1
2015 年度全国大会総括……2
2015 年度学会奨励賞の選考経緯……4
理事選挙開票結果報告……5
2014 年度全国大会予稿集について……5
支部例会実施報告　2015.6 - 2015.11……5
内規・規定改正のお知らせ……12
会議報告……12
例会および全国大会開催のお知らせ……18
事務局からのお知らせ……18

ご挨拶

太田　斎（日本中国語学会会長）

東京大学で開催された 2015 年度の大会は無事に成功裏に終了することが出来ました。皆様方のご協力とご支持の賜物と心より感謝申し上げます。また、吉川雅之会員を始めとする大会開催校の東京大学の関係教員、スタッフの皆様そして大会運営委員会の皆様のご尽力にも感謝申し上げます。次期会長（木津祐子会員）も無事選出することが出来、我々事務局もホッとしております。

例年ですと現代語文法の発表が多く、それ以外の分野の発表が少ないのですが、今回は現代語文法以外の分野の発表も多く、分野全体のバランスが取れていたような気がします。この点は数量的にはもちろん圧倒的に少ないですが、最新 262 号の『中国語学』の掲載論文についても言えそうです。このことが今後も傾向として持続して、日本の中国語学界の研究のより一層の多様性を確立することに結びつくよう願っております。特に若い世代の研究者は、私どもが若い頃と比べて、格段に厳しい状況に置かれて、大変だと思いますが、蛸壺に籠ることなく、様々なジャンルにチャレンジされることを期待いたします。

昨今は教育学部や文学部の廃止の声が上がったりして、人文科学を取り巻く現状は相当厳しいものがあります。会員の中にもご自分の所属する大学が機構改革に直面していて、ご苦労なさっている方もおられるのではないでしょうか？東大の梶田隆章教授がニュートリノに質量があることを明かにしたことについて尋ねられて、「すぐに役に立つものではない」と言っておられますが、ノーベル賞を受賞されたので、恐らく誰もその研究価値を否定されることは無いでしょう。人文科学の研

究では、そんな社会的影響力のある賞など皆無ですし、「すぐに役に立つものではない」のが当たり前で、それこそ「風が吹けば桶屋が儲かる」みたいに、巡り巡って、どこでその影響が現れるか、全く予想がつきません。しかしながら、人文科学は人知を構成する基礎部分で、この部分がしっかりしていないと、分野を問わずまともな研究はできないというのは多くの人が感じている事だと思います。「武士は食わねど高楊枝」と気取ることはないにせよ、研究への興味を持ち続けて、ささやかな「一風」を吹かせて、これがいつかどこかの「桶屋」が儲かる姿が見られることに繋がることだろうと鷹揚に構えていたいものです。

2015 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 65 回全国大会は、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）を会場に、10 月 31 日（土）11 月 1 日（日）に開催された。

（1）参加者数

参加者総数は 400 名、うち一般参加者が 368 名、招待者 2 名、書籍等の展示関係者 30 名（懇親会参加者数）であった。

（2）総評

今年の全国大会は、ほぼ例年通りの 10 月末の開催となった。好天に恵まれ、爽やかな秋日和の中、大勢の出席者が集った。開催校の東京大学には周到な準備をしていただき、当日は学生スタッフの正確かつ心のこもった大会運営及び各会場サポートにより、実り多く有意義な 2 日間であった。

初日は、北京大学郭鋭教授「汉语叙述方式的改变和“了”“着”结句现象」、開催校東京大学楊凱栄教授「汉语事件句的焦点化动因」の二つの基調講演が行われた。まず郭教授より、単独の使用で結句できない「了$_1$」と「着」が、後続のフレーズで数量表現、或いは句の外部に時間参照点を付加する「了$_2$」や「呢」を伴うことで結句可能となるとの議論から始まり、明代以降、現代に到るまでの小説の文体変遷の中で、実際には「了$_1$」が徐々に句を終了させ得る機能を獲得していること、そしてその要因として、句内部の時間参照点しか持たなかった「了$_1$」が、現代小説中では「語りの時間」を外部の時間参照点とすることで結句可能となる事実、さらに、その「語りの時間」という参照点の存在によって、「了$_1$」が「過去」を示す標識としての機能を持つに到っていることが示された。また楊教授は、同様に已然の事件を示す句であっても、「了」を付加できる場合とできない場合があるのは、句の中で焦点となる成分（仕手、時間、場所、道具）の違いによるものが大きく、その差異と序列を分析することにより、「是～的」では焦点化されにくいとされる「原因」成分の位置づけをも再検討可能であると導く。異なる視座から相関連する事象を論ずる両氏の公演は非常に刺激的で、講演後はフロアを含めて活発な議論が展開された。

ワークショップは、今年度は 2 グループがセッションを行った。

第一会場では、鈴木武生会員・楊明会員の企画による「中国語結果構文における諸問題を巡る展開と今後の展望–認知文法、概念意味

論、統語論によるアプローチから」で、鈴木・楊両会員の他に、秋山淳会員・李鵬会員が発表を行った。若手の研究者を中心に意欲的な議論が展開された。また、第二会場は、竹越孝会員の企画による「太田辰夫的汉语史研究」で、竹越会員・山田忠司会員・大西博子会員、さらに中国から汪维辉教授が、それぞれの領域から太田辰夫先生の業績を掘り下げた。コメンテーター佐藤晴彦会員は、高弟の一人として太田先生の素顔を活き活きと描写された。

ポスターセッションは、昨年同様、二日目昼の時間帯に実施された。ブースに用意された資材の形状とポスター作成要項との間に食い違いが生じていたことが当日発覚するという問題が有ったが、開催校の臨機応変の対応で、無事プレゼンテーションを実施することができた。これは、大会運営委員会の事前確認が不足していたことにも要因があり、今後に向けての課題としたい。

また、本大会では、昨年より企画されてきている託児施設の利用が、初めて実現した。今後のスムーズな運用に向けて、利用実績ができたことの意味は大きい。

今大会を大過なく終えることができたのは、ひとえに開催校である東京大学の諸会員及び多くのスタッフの尽力の賜物である。特に、各会場から懇親会に到るまで、学生スタッフの機敏で的確な働きぶりは特筆に値するものであった。この場を借りて厚く御礼を申し上げる。

(3) 改善点・反省点

今回は、開催までの過程を含め、幾つかの問題が発生した。

まず最初に、予稿集原稿の不提出に伴う発表資格取り消しが 2 件発生した。編集担当校の東京大学から再三にわたり督促を行ったが全く反応が無く、やむなく 2 件の発表を取り消さねばならない事態となった。予稿集編集に多大の影響を被ったのみならず、8 月初旬に公開した大会スケジュール及び分科会スケジュールをやむなく変更するなど大きな影響が出た。これは過去に前例の無いことである。うち 1 名からは、発表資格取消後に「辞退理由書」の提出があったが、1 名からは理由書の提出もなく、応募規定に従い、当該会員に対しては、第 66 回大会への応募資格を認めない旨の通知を行った。

もう一つは、予稿集原稿の遅延に関するものである。原稿提出遅延に伴い、3 名の会員に対して遅延理由書の提出を求めることとなった。

また、大会後に各会場の司会者から、予稿集掲載論文内容と異なる研究発表が有ったとの報告が数件寄せられた。特に、講評付きの研究発表でありながら、予稿集未掲載の大量の用例に基づき論文構成を変更して発表を行うというケースについては、研究発表の基本的ルールを逸脱したものと見なさざるを得ない。このような発表が複数存在したことは、極めて遺憾なことである。

原稿の提出遅延や不提出は予稿集の編集のみならず大会準備作業に甚大な影響を及ぼし、予稿集掲載論文と乖離した内容を発表することは、会場での議論に支障を生ずる。引き続き、各会員の強い自覚を求めたい。

また、中国からの発表予定者 1 名が、ビザ取得が間に合わないとの理由で発表を辞退され、発表をスケジュールから除外する対処を行った。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

(1) 来年度の第 66 回大会は、立命館アジア

太平洋大学（別府市）で開催される。開催時期は、2016 年 11 月 12 日（土）13 日（日）の予定である。

（2）来年度も初日の企画は招待講演 1 本＋ワークショップとし、二日目に分科会発表及びポスターセッションを行うという方針で臨みたい。従来、ワークショップは入念な準備が必要とのことで、応募時期は一般の発表申込より早く設定してきたが、そろそろ企画自体も軌道に乗ってきたので、来年度については、2016 年 5 月 1 日（日）より 5 月 28 日（土）までとする。詳細については 2015 年 12 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載するので参照されたい。

（3）来年度も、一般発表の応募規定はウェブサイトでの告知のみとする。4 月初旬頃までに学会ウェブサイトに掲載されるので、その要領に沿って応募されたい。予稿集投稿規定については、本年度の反省点を踏まえ、投稿媒体を「電子ファイル」のみとする予定で準備を進めている。追ってウェブサイトに掲載予定であるので注意されたい。

（4）開催準備及び大会運営に関しては、今年度の経験をふまえて改善を進めたい。今後も簡素化を図って開催校の負担を減らしていく方針であり、引き続き参加者のご理解とご協力をお願いする次第である。

（大会運営委員会）

2015 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2015 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』261 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 3 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文について慎重な協議を行なった結果、以下の論文を 2015 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認されました。

学会奨励賞受賞論文
論　題：“那”的非典型语用功能
著　者：劉　驫（神奈川大学）

【選考の経緯】

近年、中国語の指示詞が英語の定冠詞のような定性機能を獲得しつつあるという議論が相次いで発表されているが、それらの多くは“那”よりも“这”にその機能を認めている。本論文は、豊富な言語資料に基づいて、“这”よりも“那”の非典型的用法の方に定性機能が認められることを明らかにした。理論研究の成果をふまえた独創的な視点は高く評価することができる。また、フレーム理論に基づいて、フレームと黙認要素の意味的対応関係の強弱が“那”の非典型的用法の選択を決定づける重要な条件であることを指摘した点も評価に値する。

なお、審査段階においては、理論研究の枠組みにとらわれ、中国語学の先行研究に対する言及が不十分であるという指摘もあったが、本論文の独創性を否定するほどの問題ではないと判断された。この分野の研究のさらなる発展を期待して奨励賞を授与する。

（編集委員会）

理事選挙開票結果報告

第 65 回全国大会第 1 日（東京大学駒場キャンパス、2015 年 10 月 31 日）に理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2016-17 年度）会長および理事に当選されました（「会長及び理事選出に関する内規」参照）。なお副会長につきましては、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。

当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数：452 票（うち、有効投票総数 328 票、白票 103 票、無効票 21 票）

■得票数：

1. 木津　祐子　64（会長）
2. 三宅　登之　26
3. 竹越　　孝　23
4. 佐々木勲人　19
5. 古川　　裕　16
6. 山崎　直樹　14
7. 遠藤　光暁　11
7. 加藤　晴子　11（以上理事）

次点　池田　　巧　8

（選挙管理委員長　小野秀樹）

2014 年度全国大会予稿集について

第 64 回全国大会（2014 年 11 月 15-16 日、大阪大学）における以下の口頭発表につき、学会著作権規定に違反するとの申し立てが会員から寄せられました。研究公正調査委員会による調査の結果、違反の事実が認められましたので、『中国語学』第 262 号及び学会ウェブサイトに掲載されたプログラムから当該発表を削除し、予稿集掲載原稿を無効としました。会員諸氏におかれましては、お手持ちの予稿集からの引用を控えていただきますようお願いします。

論題：開成石経の字体規範について

（会長）

支部例会実施報告　2015.6 - 2015.11

◆北海道支部例会

◇2015 年 9 月 11 日（土）釧路公立大学

・杉村博文（大阪大学）：意合法 ― Covert カテゴリーの発見

袁毓林（2014）《汉语意合语法的认知机制和描写体系》は、中国語のシンタクスが「以意合法为主」であると認めた上で「意合法」を「低级版本」と「高级版本」とに分け、さらに「意合」を可能にする認知基盤を紹介すると同時に、その心理的過程を操作可能にする記述体系を提示した。本発表は袁毓林（2014）に基づき、「意合法」の「低级版本」と「高级版本」の実際をより詳細に検討し、加えてその記述体系に残る問題を検討する。

・丁浩（新潟大学・院）：中国語の将然相形式に関する一考察―“快～了”、“要～了”、

“该～了”の使い分けと意味の分析を中心に—

呂叔相（1980）、劉月華（2001）、荒川清秀（2003）などは中国語の構文“快～了”、“要～了”、“该～了”の使い分けを分析し、朱継征（2000）はこれらの構文が属する中国語の将然相を「実際には動作・作用はまだ開始していないが、すでに実現態勢に入っている過程を指す。」と定義した。これらの構文の例として、“快到梅雨季节了”、“飞机要起飞了”、“该回家了”などが挙げられる。これらの構文については、具体的な意味の相違を分析した研究が限られており、どんな場合に置き換えが可能あるいは不可能であるのか明らかにされていない。そこで、本研究は“快～了”、“要～了”、“该～了”の３つの構文の使い分けと意味の相違を中心に分析する。

・山田大輔（北海道大学・院）：上古漢語における文末の“矣”の機能及び中古漢語期にかけての機能の変遷について

上古漢語における文末の“矣”は、中古漢語期にかけて大きく減少する。本発表は、“矣”の使用の減少は、機能が他の語に少しずつ受け継がれていったからであるということを指摘する。具体的には、①“矣”の已然（もしくはパーフェクト）の機能は時間副詞“已”に受け継がれた、②“矣”の已然（もしくはパーフェクト）以外の用法（主に推定用法）は副詞（助動詞）の“當”などに受け継がれた、ということを指摘する。

・飯田真紀（北海道大学）：広東語の文末助詞“gE2”の意味変化

広東語の文末助詞“ge2”は一般に 2 種類の形式が区別されるが、そのうち音調の長い ge2（以下“gE2”と標記）について、先行研究では、「不確かさ」や「留保」、あるいはそれとは逆に「肯定の強化」といった意味記述がなされてきた。しかし、これらの意味記述は gE2 の多様な用法をうまく説明できない。そこで、本発表では gE2 に基本的な意味とそこからの意味変化を仮定し、様々な用法の広がりを説明することを試みる。すなわち、概略的には、gE2 は「想定と対立する意見の提示」を基本的な意味としつつ、そこから「対立命題の存在の暗示」へと意味変化し、その結果、話し手自身の意見に「留保」をつける用法や談話接続的な用法を持つに至ったと考えられる。

・賈麗穎（新潟大学・院）：結果補語“完”と“好”について—文法的使い分けと意味的相違の比較研究—

結果補語の“完”と“好”の比較研究については陳忠（2008）が“V＋完了”の受動は「複数」であれば、構文の成立し難いことを表すことを明らかにした。しかし、例えば“这辆车修完了”のように、「複数」という制限では説明できない用例があり、“完”と“好”の前の“V”との関係が明らかにならない。近年では動詞分類の観点から分析しようとする研究がいくつかあるが、分類する前に構文の制限をほとんどしなく、まだ不十分と思われる。本発表では“完”と“好”の構文論と意味論から、それぞれ分析する。その上で、統一構文での“V＋完”と“V＋好”を述語として、その“V”は動詞分類の観点から分析し、比較する。

・楊安娜（北海道大学・院）：動詞コピー文の意味機能について

現代中国語における“他写字写得很好”（彼は字を書くのが上手だ）のような「動詞コピー文」（「S＋V＋O＋V＋C」と表記）に関する研究は、王力（1944）以来数多く提出されている。一般的には、目的語（O）が非指示的（non-referential）であるという構文的特徴を備え、かつ「動作行為の予期せぬ結果を強調する」という意味的特徴を有するとされている。しかしながら、実際にはこのような条件からはずれた動詞コピ

一文も少なくない。本発表では、まず動詞コピー文を幾つかのタイプに分類した上で、それらの意味的関連性の検討を行い、動詞コピー文の意味機能について新たな見方を提示することを試みる。

・山崎直樹（関西大学）、植村麻紀子（神田外語大学）、鈴木慶夏（釧路公立大学）、中西千香（愛知県立大学）、西香織（北九州市立大学）: 文型からコミュニケーションに至る方法とコミュニケーションから文型に至る方法

外国語教育の目標の 1 つとして「コミュニケーション能力の育成」が挙げられる。この目標のために伝統的な方法で授業の設計を行うと、言語活動は次の過程で展開する……1）構造的活動＞2）擬似コミュニカティブ活動＞3）機能的コミュニケーション活動＞4）社会的インタラクション活動。しかし、一般的な中国語の初級教科書に基づいてこの過程を辿る（＝文型からコミュニケーションに至る）と、幾つかの問題点（例：より高次の活動になるほどテーマ性を失い、活動間の連携が無くなる）に直面する。本研究は、この問題点を克服する方法として「コミュニケーションから文型に至る方法」を提示し、その理論的枠組みを紹介する。

◆関東支部例会

◇2015 年 6 月 20 日（土）文教大学

・崔婷（東京外国語大学・院）:“哭湿”类动结式的事件性特征

本文针对“哭湿”类动结式的两种表达形式，从事件性特征的角度进行了考察。“哭湿”类动结式的一元非宾格形式和二元非宾格形式分别在具体事件和经常性事件的分布当中产生了对立的情况。具体来说，一元非宾格形式可以与“快…了”、“开始”等标记共现表示变化的开始；也可以与“缓缓”等表示缓慢义副词共现表示变化的进行，具有时间轴上的描写功能。而在二元非宾格形式无法在时间轴上表示阶段性变化，而是与“常常”等副词或表示频度的名词共现表达某种情况经常出现。在用法上，两种形式都有一种通指用法。如经常性事件里出现的一元非宾格形式的主语必须表示通指意义；二元非宾格形式陈述一个非事件性的命题时，宾语表示通指意义。

・田村新（文教大学・非）: 日中の『漢文典』に関する一考察

来裕恂 1906『漢文典』は馬建忠 1898『馬氏文通』に次いで、中国で二番目に書かれた中国語文言文に関する著作である。該書の序において、来裕恂は猪狩幸之助 1898『漢文典』、児島献吉郎 1902-1903『漢文典』などの書名を日本の研究として挙げている。これらの著作はいわゆる「漢文」の文法を記述したものである。来裕恂はこれらに対する反発から自ら『漢文典』を執筆したようである。本研究では、来裕恂、狩野幸之助、児島献吉郎の三氏の『漢文典』を比較対照し、来裕恂が日本の研究の何を受容し、何を受容しなかったのかについて考察を試みる。この時期は西洋文法の模倣とよく言われるが、本研究の結果から日本の研究の受容の可能性について検討する。

◇2015 年 7 月 25 日（土）首都大学東京

・渡邊奈津子（東京外国語大学・院）:“能”と“可以”の使用状況について――用途を表す場合

“能”と“可以”の意味や使用状況の相違については先行研究によって少なからぬ指摘が行われている。一方で、“橘子皮还{能/可以}做药。”のような、“能”と“可以”が用途を表す場合については、意味の差が出にくくなるという指摘や、基本的に置き換えが可能であるという指摘が存在する。本発表では、コーパスで収集した用途を表す場合の“能”と“可以”の用例を対象に調査を行った結果、両者の使用状況に

差異が見られること、さらにその差異と両者の意味との間には関連があることを指摘する。

・川下崇（首都大学東京・院）：朝鮮資料に見られる方向を表す介詞について

本発表では、元明期における朝鮮資料を取り上げ、そこに見られる「往」、「投」、「到」等の方向を表す介詞について考察する。これらの介詞は「～へ」という意味を表すが、資料によって出現に偏りが見られるようである。例えば、介詞「投」は、旧本『老乞大』や『翻訳老乞大』に見られるが、『朴通事諺解』や『訓世評話』には見られない。本発表では、資料ごとの出現状況、搭配関係について検討したい。

・劉春芳（首都大学東京・院）：關於《金瓶梅詞話》“出來”的研究

本文欲對《金瓶梅詞話》（第七回至第十六回）的“出來”進行語法功能和語義類別兩方面研究。從語法功能的角度，當“來”位於動詞“出”之後，作單音節的趨向補語時，“出來”是動補結構，在句中充當謂語，《金瓶梅詞話》凡 38 例。“出來”位於在其他動詞之後，作該動詞的雙音節趨向補語，《金瓶梅詞話》凡 56 例。從語義類別的角度，動補結構“出來”的語義分類為二：從裡往外義凡 37 例；出現義凡 1 例。趨向補語“出來”的語義分類為四：動作由里向外義凡 31 例、動作完成或實現義凡 8 例、由隱蔽到顯露義凡 12 例和獲得了某種性能義凡 5 例。與《現代漢語詞典》（第六版）的釋義對照，《金瓶梅詞話》的“出來”作趨向補語時的“獲得了某種性能”義項為前者所無。

・森広江（首都大学東京・院）：福清方言音系の一考察

本発表では福清方言の先行研究である馮（1993）との比較を通して、福清方言の現状について報告する。福清方言の音系全体に関する先行研究としては馮愛珍（1993）『福清方言研究』が挙げられる。今回の東張鎮での調査結果から先行研究とは以下のような相違点が見られた。①馮（1993）では合流により消滅したとされる韻母［ui］、韻母［iu］を保存している。②馮（1993）で報告された変韻の規則から漏れる例外が見られる。東張鎮は馮（1993）の調査地点である融城鎮と同方言区に属するが、より古い体系を残している可能性が高い。本発表では方言の現状について報告すると共に、その可能性について検討したい。

◇2015 年 10 月 17 日（土）日本大学

・劉子瑜（日本大学/北京大学）：唐诗一字平去两读而义同义别兼具问题论析

本报告对唐诗中 48 个单字具有平去两读义同兼义别的音义关系及用法进行了论证，结论是：1．这 48 字绝大多数是上古平声字，魏晋南北朝时期又有了声韵相同的去声，于是诗作中出现了一字平去义同兼义别的用例，唐诗中获得了空前发展。2．这 48 字具有两读义同特点的义项分两类：一为本义，一为引申义，所形成的两读义同和一读（或两读）义别的关系，既显示了各字义项有本义与引申义的区别，又显示诸义词性的不同，这与诸字声韵相同而调不同的语音密切关系是相对应的。3．这种音义关系和特点最大限度地满足了唐代诗体声律的需要，为诗人依律审音用字提供了更为自如的选择余地，对唐代诗律的形成和繁盛起了促进作用。唐以后明显衰减。

・紀宝紅（新潟大学・院）：“在～”と“～着”の文法的使い分けと意味的分析について

石毓智（2006）では、「進行相を表す文法形式である“在”は過去のある時間から現在までの進行を表す。“着”は現在から未来の進行を表し、またある行為や動作が終わった後の状態の持続も表す。時間軸における発話時点を基準にして、“在”と“着”を使い分ける」と指摘されている。しかし、動相と時制の概念を混同しているため、動相形式としての“在”と“着”の相違を論じるのに不適切であると考える。本発表で

は石毓智（2006）の見解を基に、“在”と“着”が置き換えられる場合と置き換えられない場合の動詞をそのアスペクト的特徴により継続動詞、瞬間動詞、状態動詞に分類し、その上で、両方の文法的使い分けを制約する要因と意味上の相違を明らかにしたい。

・渡邊奈津子（東京外国語大学・院）：“能VC”と“V得C”の表す「可能」の意味について

助動詞“能”の肯定形“能 VC”と可能補語の肯定形“V 得 C”の使用状況や意味の差異について、先行研究の指摘により明らかになっている部分もあるが、いまだに不明な点も残っている。“能 VC”と“V 得 C”が、条件や能力など、どのような意味を表す場合に多く用いられるのか、コーパスを使用して収集した用例に対して意味の面からの分類を行った結果、両者の間で一定の使用傾向の差が見られた。本発表では、“能 VC”と“V 得 C”の意味分類と用例の観察結果について報告した後、使用傾向の差から見られる“能 VC”と“V 得 C”二つの表現形式の表す意味の差について考察を行う。また先行研究で指摘されていることとの関連についても検討する。

◆東海支部例会

◇2015 年 11 月 14 日（土）愛知大学

・張翼翔（新潟大学・院）：“不”と“没（有）”による形容詞分類について

現代中国語では、形容詞は様々な方面から分類できる。張斌（2003）は、「静態形容詞」は“不”と共起できるが、「動態形容詞」は“没（有）”としか共起できないと主張する。これまでに“不”と“没（有）”の意味上の相違点及び形容詞分類に関する先行研究はそれぞれ沢山あるが、形容詞を否定する際に、どのような場合に“不”しか使えないか、どのような場合に“没（有）”しか使えないかという否定副詞との関連から考察した研究はまだ少ない。本発表では、“不”と“没（有）”との結び付きにより形容詞を分類し、それぞれ使える場合と使えない場合をまとめ、その特徴や規律を明らかにしたい。

・丸尾誠（名古屋大学）：中国語の結果補語“着 zháo”の表す対象への働きかけ―「接触義」から考える―

中国語の結果補語“着 zháo”の表す代表的な意味として、「目的の達成」（例：买着）や「結果や影響が生じたこと」（例：冻着）を表すといったものが挙げられる。とりわけ後者については、例えば“摔着”などは「（転んだ結果）けがをする」という言語化されていない段階まで含意することもあって日本人学習者には理解しにくく、動補フレーズ“V 着”を日本語に訳出する際には、往々にして中国語母語話者の発想・認識に基づいて、その行為・状態のもたらす結果を反映させる必要が生じる。本発表では“V 着”の形を用いて表現される動機づけについて、動詞“着 zháo”の基本義である接触・付着義がもたらす「対象への働きかけ」という機能に着目し、考察を試みる。

・荒川清秀（愛知大学）：助動詞の根源的用法と認識的用法について

助動詞はかつて能願動詞と呼ばれたが、最近では助動詞という品詞を認めず、動詞の下位分類とする立場（郭鋭『現代漢語詞典』）もあり、言語学からは「情態動詞」として呼ばれることが多くなってきた。さらに、その用法もモダリティの観点から大きく根源的用法と認識的用法に分け論じられるようになった。しかし、この二つの用法はわたしたち外国人にはなかなか見分けがたいときがある。本報告では、こうしたものを一応「助動詞」と呼ぶことにし、なにを助動詞と認めるか、助動詞の意味をどう分けるかを考えるとともに、主として、二つの意味の違いに後続述語、人称がどうかかわっているかについて述べたい。

・中西千香（愛知県立大学）：「めやす」に基づく文型リスト作成にあたっての問題点

「外国語学習のめやす（以下「めやす」）」では、中国語の発話を 15 の話題分野にわけ、コミュニケーション行動を「～できる」という Can-do statement（能力記述文、以下 Can-do）で示した指標を提案している。この「めやす」があっても、これらを意識して、教材や授業の中へどう援用するかを考えなければ、「めやす」の存在意義は薄れてしまう。発表者が参加する科研グループでは目下、各分野の Can-do に基づく適切な文型リストを作成している。本発表では、文型リスト作成において、何が問題となり、教学の際にどのような「注意」を払うべきかについて議論したい。発表者は、この「注意」はコミュニケーションの本質に関わるものと考える。

・山崎直樹（関西大学）:「外国語学習のめやす」が中国語教育にもたらすもの

「外国語学習のめやす」は、何らかの課題を解決し新しく人的関係を構築する能力の育成を目指した学習の指針である。このため、人の活動の 15 の領域において「～できる」という形で「コミュニケーション能力指標」を提案している。発表者らはこの指標に基づき、学習項目となる文型と語彙の一覧を策定中である。この作業は「語彙と文法を教え、ドリルを行い、それを使った会話の練習をする」という従来の授業の逆方向であるだけに思える。しかし、作業の過程で、従来の方向ではわからなかった新たな語用論的事実が見つかり、「～できる」から出発したアプローチは文型と語彙の選択に影響を与えることがわかった。これを具体的に紹介したい。

◆関西支部例会

◇2015 年 6 月 27 日（土）関西学院大学

・王棋（神戸市外国語大・院）：论趋向补语“上”的语义扩张

本文以现代汉语单音节动词 V 与“上”构成的“V 上”结构为考察对象，从“上”的语义属性及语义特征入手，通过对比“V 上”在物理空间的位移事件中呈现出的具象语义，着重考察“上”跨域映射的认知扩展语义。同时，尝试运用认知语言学的相关理论构拟出“V 上”的意象图式，清晰地呈现各义项间的共性与差异，解释其不同义项的语义交叉及语义分化的原因和机制，探讨“上”由内容语到机能语，从空间范畴跨越到时间范畴，再过渡到性质范畴等一系列链条式扩张的语法化脉络。

・劉洋（神戸市外国語大・院）：現代標準中国語における中間構文を再考する

中間構文とは、英語の‘The book sells well’（NP＋VP＋AP）のように、非動作主を主語とし、能動的な形式で受動的な意味を表す構文であるとされる。従来の中国語中間構文に関する研究は、研究者によって認定基準が異なるものとなっている。また、主に英語中間構文に相当する“V-起来”などの有標構文にとどまるものであり、中間態の本質と無標中間構文、さらに AP 生起の義務性の有無等に関する本格的な研究が待たれる状況である。本発表は、英語と中国語の中間構文に関する先行研究を踏まえて、その生起条件を再確認し、中国語中間構文の認定基準を見直す。また、属性叙述の類型の観点から、プロトタイプから周辺事例までの違いが捉えられるような記述を試みる。

・鄭瓊花（新潟大学・院）：存在文における“V 着”と“V 了”構文について

朱継征（2000）、劉琛琛（2007）では“墙上挂着/了一幅画”、“床上躺着/了一个人”のような「場所＋“V 着”/“V 了”＋名詞」構文によく出てくる動詞は動作動詞と状態動詞などに分類され、意味論から研究されてきたが、動作作用主体と存在主体の関係についてはまだ触れていないようである。“挂着/了”の動作作用主体と存在主体は同

じで、“躺着/了”の動作作用主体と存在主体は異なる。本稿では主に動作作用主体と存在主体を考慮し、「場所＋“V 着”/“V 了”＋名詞」構文に出てくる動詞を分類し、そのうえで、“着”、“了”と共起する可能性を明らかにする。

◆九州支部例会

◇2015 年 7 月 4 日（土）福岡大学

・劉宇飛（新潟大学・院）：中国語における可能性を表す“能”と“会”に関する研究

中国語では可能表現助動詞として、“能”と“会”がよく用いられる。呂叔湘、朱德熙、渡辺麗玲など著名な学者は“能”と“会”を多方面から研究した。しかし、可能性の高低についての研究はまだ少ない。沈家煊（1989）は「概率情態」という術語を用いて「可能性」（即ち、「蓋然性」、可能性の高低）を表し、「一定＞很可能＞能/会＞可能＞0」という結論が出た。周有斌（2010）は「会＞能／要＞很可能＞多半＞0.5＞可能＞0」の順に可能性の高さを並べることができる。本研究では、中国語における可能性を表す助動詞“能”と“会”について、両者が可能性の高低にどのような使い分けが存在するのかを分析する。

・石亮亮（熊本大学・院）：以“闹热”－“热闹”这对逆序词为例考察同义逆序词的历史演变特点和原因

近代汉语上承上、中古汉语，下启现代汉语，具有重要的语学研究价值，此阶段频繁出现逆序词，它们与古代汉语、现代汉语存在千丝万缕的联系，通过对此阶段出现的逆序词的考察，对汉语词汇发展的轨迹的分析起到一定积极的作用。本文从历时的角度，利用同时代或历代的语料语库，选取《醒世姻缘传》中的“闹热”－“热闹”两序作为研究对象，对其在汉语史上的发展演变轨迹加以考察，通过典型性的个案分析，初步研究同义逆序词两序的产生、分化、淘汰和保留情况以及揭示其演变的特点，并初步探讨其演变的原因。

・郭晓萌（熊本大学・研究生）：《水浒传》中“动词＋得＋补语”用法研究

“动词＋得＋补语”在近代汉语中，是一个重要用法。根据补语的词性不同，“得”字所表现的意思也不同。本文在前人研究的基础上，结合语料库，对“动词＋得＋补语”这一用法进行了研究。《水浒传》作为近代汉语的典型著作，具有一定的代表性，所以本文主要以《水浒传》为蓝本，主要解决以下两个问题：1.分析“得”后成分如果作为补语使用，需是什么词性。2.“得”后面成分为补语的情况下，“得”字的意思与词性之间的关系。本文主要通过对先行研究的归纳与整理的方法，提出自己的拙见。

・趙葵欣（福岡大学）：也谈“要”与“若”—19 世纪末汉语官话助动词系列研究之二

《语言自迩集》“谈论篇百章”转用两个世纪前的《清文指要》时，将其中假设用法的“要”全都改为了“若”。但该书的其它部分如散语章、问答章里仍有“要”表假设的用法，同时也用“若”、“若是”、“倘若”等表假设。这一资料可以帮助解释刘祥柏（2014）提出的假设义“要”仅见于明清小说而不见于其他口语资料的疑问，并表明“要”即“若”的可能性不大。假设义“要”由表意愿的模态词语法化而来，但在用于假设分句时，已经超越模态范畴，具有文本功能。“要”的表意愿用法具有明显的主观性，发展为假设用法后，主观性削弱，是从 subjective>textual function（Narrog 2012）的一个例子。

内規改正のお知らせ

■ 2015 年 10 月 31 日、東京大学駒場キャンパスで開催された評議会において、内規の改正が承認されました。

改正前	改正後
『中国語学』編集委員会に関する内規 **（→第 15 条，第 16 条関連）** （4）特別編集委員 理事会と編集委員会は『中国語学』編集に関する学術的サポートを得るため，海外の専門家 5 名を特別編集委員として選出し，会長が委嘱する。	（4）特別編集委員 理事会と編集委員会は『中国語学』編集に関する学術的サポートを得るため，海外の専門家 5 名程度を特別編集委員として選出し，会長が委嘱する。

【改正理由】語彙・語法史分野の充実に向けて増員を図る必要があるため。

規定改正のお知らせ

■ 2015 年 10 月 31 日、東京大学駒場キャンパスで開催された評議会において、規定の改正が承認されました。

改正前	改正後
日本中国語学会著作権規定 **第 6 条［著作者による保証］** 本著作者は、本著作物が、第三者の権利を一切侵害していないことを保証する。	本著作者は、本著作物が、第三者の権利を一切侵害していないことを保証する。本条に違反したことが明らかになった場合、全ての責めは本著作者が負うものとする。

【改正理由】責任の所在を明確化する必要があるため。

会議報告

■ **2015 年度第 2 回理事会**

日時：2015 年 10 月 30 日（金）16 時～18 時
場所：東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階コラボレーションルーム 4
出席者：太田斎（会長）；大西克也*（副会長）；遠藤光暁、小野秀樹、木津祐子**、

平井和之、古川裕、楊凱栄（以上理事）；佐々木勲人（編集委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；紺野達也、竹越孝（以上幹事）

* 研究公正調査委員長を兼ねる

** 大会運営委員長を兼ねる

欠席者：平田昌司（辞典編纂委員長）

■ **2015 年度評議会**

日時：2015 年 10 月 31 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

場所：東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE West 地階 K003 レクチャーホール

出席者：構成員 42 名（定数 64 名）

■ **2015 年度総会**

日時：2015 年 10 月 31 日（土）17 時 20 分～18 時 20 分

場所：東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE East 地階 K011 ホール

【議長選出】

議長に山田忠司会員（文教大学）、小嶋美由紀会員（関西大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

竹越幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2014 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1249 名	＋47
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	24 名	±0
	通常会員	764 名	－4
	ネット会員	337 名	＋33
	団体会員	8 名	±0
	海外会員	111 名	＋18
賛助会員		24 社	＋1

・〔昨年度除籍者〕39 名（国内会員 31 名 / 海外会員 7 名 / 賛助会員 1 社）［2014 年 10 月 1 日付］

・〔今年度除籍予定者〕34 名（国内会員 22 名 / 海外会員 12 名）

・〔ご逝去〕1 名（金丸邦三名誉会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。

＊ e-naf の管理者ページには、賛助会員およびダミーデータ 1 名および海外特別編集委員 4 名と国内寄贈会員 1 名を加えた合計 1279 名を「現在の会員数」として表示［10 月 1 日付］。

1.2. 支部例会関連

竹越幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』262 号「彙報」を参照。

・支部例会開催通知はメールに移行、ハガキ希望の方には郵送を継続。

2. 編集委員会報告

佐々木委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 262 号は、2015 年 10 月 31 日に 1,470 部を発行した。

・学会奨励賞受賞者として以下の 1 名を推薦した。

劉驫氏（神奈川大学）「“那”的非典型语用功能」

・『中国語学』投稿規程および同執筆要領を改定し、印刷した原稿正本の他にメールにて電子データを送付することとした（第 262 号に掲載済）。

3. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・第 65 回全国大会発表採択者公表の前後に、海外からのアクセスができなくなる事案が

発生した。委員会として調査を依頼し、現在は復旧している。

4. 大会運営委員会報告

木津委員長より以下の報告があった。

4.1. 委員の交代について

退任：吉川雅之

新任：前田真砂美（次年度大会開催校）

4.2. 第 65 回全国大会審査結果

・応募総数は 121 件、うち会員登録未了 1 件と会費未納 2 件を除いた有効応募総数は 118 件。審査の結果、口頭発表 51 件、ポスター発表 16 件、計 67 件を採択した。不採択数は 51 件であった。

4.3. 採択者公表について

・例年通り、学会ウェブサイトにて採択者の公表を行った。ところがちょうど公表時期に重なって、学会ウェブサイトが海外からアクセスできなくなるというトラブルが発生した。ウェブリソース委員会に調査を依頼し、復旧を待ったが、海外会員からの問い合わせが相継いだため、異例ではあるが、本大会に応募した海外会員全員（38 名）に対して、採択結果一覧を PDF ファイルにて送信する措置を行った。

4.4. 予稿集編集状況と大会発表スケジュールの変更

・8 月初に公開した大会スケジュールから、予稿集原稿の締切遅延と発表辞退により変更が生じた。

1）締切遅延について

予稿集原稿の締切は 9 月 14 日（月）であったが、その時点で原稿未着のものが 5 件有った。以下、タイプ別に状況を説明する。

（ア）2 件は、電子ファイルのみ 15 日までに到着した（紙媒体は数日遅れて到着）。遅延理由書の提出にも応じたため、予稿集に原稿を掲載した。

（イ）1 件は、紙媒体のみ締切内に到着し、電子ファイルの提出が無かった。開催校からの数度の督促にも反応が無かったが、郵送された紙媒体によって予稿集に原稿を掲載した。

（ウ）2 件は、電子ファイル・紙媒体ともに送付が無く、開催校から数度にわたり督促を行ったが無反応であった。最終締切を 9 月 23 日零時に設定し、ファイルの送付を待ったが、やはり反応が無かった。最後の督促時に、“最終締切に遅れた場合は「発表辞退」と見なす”との警告をし、応募規定第 9 条に従って、遅延ないし辞退理由書提出を求めたが、それへの反応も無かったので、この 2 名（口頭発表 1 名＋ポスター発表 1 名）は、大会スケジュールから除外した。

2）発表辞退について

中国からの発表予定者 1 名が、ビザ取得が間に合わないとの理由で発表を辞退されたため、スケジュールから除外した。

（注）この方は、ビザ申請の為の保証人となることを委員会に依頼してこられたが、応募規定 8 条に従い、その依頼は拒絶した。

3）応募規定第 9 条のペナルティについて

1）の（ウ）の 2 名に対して、9 月 25 日にプログラムから削除したことと辞退理由書の提出、及びそれがなければ次年度 66 回大会の応募資格を喪失することについて再度警告を行った。この内 1 名からは辞退理由書の提出があった。辞退理由書の提出がない 1 名についてはペナルティを課すこととした。

2）の発表辞退については、やむを得ない事情によるので、理由書の提出は求めない。

5. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より以下の報告があった。

・下記の日程で委員会を開催：2015 年 7 月 26 日（岩波書店）、9 月 27 日（岩波書店）。

5.1. 原稿の出版社送稿状況について

・現在、全体の 4 割にあたる 477 項目の確定原稿を岩波書店に送付し、出版社側で整理中。

5.2. 用語の統一について

・中国語学において使用される代詞（→代名詞）、介詞（→前置詞）などの用語に関して、（ ）内のように言い換えることとした。

5.3. 岩波書店からの校正刷について

・出版社から本学会側あての初校送付に紙媒体は用いない。PDF 形式のファイルを事務局に一括して岩波書店が送り、事務局から委員会・原稿執筆者に紙またはファイルで送ることとなった。

6. 研究公正調査委員会報告

大西委員長より、委員会の設置経緯、委員会の任務と調査の方法、及び結論について報告があった。

7. 研究公正調査委員会の調査結果について

太田会長より、研究公正調査委員会の調査結果を踏まえ、当該委員会に諮問していた処分案について報告があった。当該会員に対しては、2015 年 11 月 1 日から 2016 年 10 月 31 日までの 1 年間、全国大会・支部例会への発表応募並びに『中国語学』への投稿を禁止することとした。

8. 次期大会開催校の決定

太田会長より、立命館アジア太平洋大学（別府市）において 2016 年 11 月 12 日（土）、13 日（日）の日程で開催する旨の報告があり、開催校の前田真砂美会員より挨拶があった。

9. 役員選挙の結果について

選挙管理委員会の小野委員長より、役員選挙の結果について報告があった。

【審議事項】

1. 内規・規定の改正について

太田会長より、「『中国語学』編集委員会に関する内規」及び「日本中国語学会著作権規定」の改正について提案があり、承認された。詳細は本号「内規改正のお知らせ」及び「規定改正のお知らせ」を参照。

2. 予算案・決算案

2.1. 2014 年度会計決算案（資料参照）

紺野幹事による報告と説明、及び森宏子・奥村佳代子会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

2.2. 2016 年度会計予算案（同上）

紺野幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

3. 顧問の推挙について

太田会長より、中川正之会員を顧問に推挙したい旨の提案があり、承認された。

2014 年度会計決算書（2014 年 4 月～2015 年 3 月） 2015 年 10 月 31 日総会承認

＜収入＞（単位:円）	予算	決算
前年度繰越金	8,979,936	8,979,936
積立金	2,440,000	2,440,000
通常会員･海外会員会費収入	6,000,000	6,377,000
賛助会員会費収入	720,000	690,000
『中国語学』売上金	400,000	524,726
予稿集売上金	450,000	387,572

印税(著作権使用料)		24,000
通常貯金利子		1,280
雑益		29,177
計	18,989,936	19,453,691

＜支出＞	予算	決算
会誌印刷費	2,800,000	1,502,146
予稿集印刷費	500,000	856,656
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	112,612
通信費	500,000	543,381
事務費	2,000,000	1,931,255
大会事務費	300,000	48,600
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	238,633
編集委員会経費	120,000	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	79,635
ホームページ関連経費	180,000	46,800
大会運営委員会経費	220,000	180,000
辞典編纂委員会経費	120,000	64,560
旅費交通費	600,000	586,000
会議費等雑費	180,000	119,478
学会奨励賞	100,000	100,000
会員名簿印刷費	780,000	872,694
積立金	2,480,000	2,480,000
［内訳］		
記念大会積立金（28 万）		
事務委託関係積立金（120 万）		
ウェブサイト構築積立金（50 万）		
国際会議開催支援積立金（50 万）		
予備費	3,272,139	9,229,241
計	15,414,139	19,453,691

監査の結果、経理内容は適正であり、経理諸表は適確に処理されていることを認めます。

2015 年 7 月 12 日

2014 年度会計監査　森　　宏子

2014 年度会計監査　奥村佳代子

2016 年度会計予算案（2016 年 4 月～2017 年 3 月）　2015 年 10 月 31 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	2,750,139
積立からの繰入金	2,520,000
通常会員会費収入	6,500,000
賛助会員会費収入	720,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
計	13,340,139

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,300,000
予稿集印刷費	500,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	450,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	350,000
編集委員会経費	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	600,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
会員名簿印刷費	780,000
積立金	2,560,000
［内訳］	
記念大会積立金（32 万）	
事務委託関係積立金（124 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（50 万）	
予備費	1,558,139
計	13,340,139

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

北陸支部：2016 年 2 月あるいは 3 月

中国支部：2016 年 1 月 24 日

支部例会の発表者、参会者ともに歓迎します。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 66 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 66 回全国大会は、2016 年 11 月 12 日（土）、13 日（日）に立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）にて開催されます。ワークショップの応募要項は 2015 年 12 月末までに、また一般研究発表の応募要項は 2016 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 66 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ 会費未納による除籍者

（「会費納入に関する内規」による）

ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ　（以上 34 名、敬称略）

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、ẽ ẽ ẽ、

ẽ ẽ ẽ、□□□、□□、□□□、□□

（敬称略）

■ 2015 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会

口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2016年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（http://www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

事務局への郵便物は、

〒651-2187

神戸市西区学園東町9-1

神戸市外国語大学中国学科内

日本中国語学会事務局　宛

までお願いします。

■ 会報の訂正

2014年12月発行の日本中国語学会々報 p.16「2013年度会計決算書」における「通常会員収入」の決算額「6,616,080」及び「大会事務費」の決算額「156,904」は、正しくはそれぞれ「6,616,000」、「179,502」でした。お詫びして訂正します。なお、2014年度全国大会にて配付した決算資料ならびに『中国語学』262号の決算表に誤りはありません。

日本中国語学会々報　2015 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学　中国学科内
E-mail: jimukyok@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2015 年 12 月 18 日